

# 上映映画解説

1953, 7

国立近代美術館 フィルム ライブラリー



## No.9

## La Chute de la Maison Usher

### 「アッシャー家の末裔」鑑賞会に ついで

フィルム・ライブラリーでは、その事業の一部として歴史的価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞し研究することとなり、さきに第一回「ジークフリート」(独、一九二四年)第二回「ヴァリエテ」(独、一九二五年)の鑑賞会を開催しましたが、今回は引き続き第三回として、多少方向を変えてフランスのものにし、四月に逝去したエプスタン追悼の意味も含めて「アッシャー家の末裔」をとり上げることにしました。

「アッシャー家の末裔」は、一九二八年(昭和三年)フランスのエプスタン・フィルムで製作されたもので、サイレント末期の傑作です。我が国では、一九二九年七月八日から新宿武蔵野館、浅草東京館で封切され、その異常な映画感覚は、高級なファンに、センセーショナルな反響を呼びました。

### アッシャー家の末裔 五巻

一九二八年度佐ジャン・エプスタン映画

——スタッフ——

原作……エドガア・アラン・ポー

脚色・監督……ジャン・エプスタン

撮影……ルーク・カス

装置……ピエール・ケツフェル

——キャスト——

ロデリック・アッシャー

……ジャン・ドビュクール

その妻……イダウリーヌ……

マルグリット・アベル・ガンス

訪問者……ジャール・ラミイ

The Fall of the House Usher

(La Chute de la Maison Usher)

Lady Madeline Usher……Marguerite Abel Gance

Sir Roderick Usher……Jean Debucourt

The Visitor……Charles Lamy

From the works of Edgar A. Poe,

Adapted and Directed by Jean Epstein.

Photographed by Lucas.

Settings by Pierre Keffor.

Released in 1928.  
(上映のフィルムは映画芸術保存会所蔵のもの)

当時のキネマ旬報第三二五号(一九二九年三月二日号)は、この映画の紹介文を載せ、

略筋——不気味な燐光と、妖気の様な霧と、じめじめとした人氣の絶えた沼地と、アッシャーの館はその中に一つ取り残された様に立つてゐた。その荒れ果てた姿はなにかしら人を憂鬱にするのであつた。館の中ではアッシャーの最後の血をつぐ当主ロデリックが妻のマドウリーヌをモデルとして毎日その肖像を描いてゐた。妻の肖像を描くといふのはアッシャーの代々の慣はしであつた。その肖像が生姿を得れば得る程、その描かれる人物は衰弱して行くのである。或る日、それは秋の夕ぐれであつた。ロデリックを訪ねて友人がこの館に来た。久方ぶりである館に笑聲が起つた。が、それも東の間で再びロデリックに画筆を手にする衝動が来た。そして肖像が愈々生の輝きを増して来た時、妻マドウリーヌの命の緒は絶えた。そしてロデリックと友と医師とは、マドウリーヌの亡骸を棺に納め、野を横ぎり、川を越し、墓穴へと運んだ。が、ロデリックには妻が未だ生きてゐるのだといふ考へが常に頭にあつた。マドウリーヌがあつた後のアッシャーの館は更に淋しくなつた。そして以前に増して妖しい音と影とに満されて行つた。それが募り募つて極度に達したと見えた或る嵐の夜、風のむせび泣き、稲妻の閃めきの内にロデリックに異常な靈感と衝動と精神力とが起つた。棺槨は壊れて蓋は地上に響きをたてた。そしてその内からマドウリーヌが白い薄衣に包まれて立ち上つて来た。ロデリックは妻が已れの傍へ崩れる様に歩いて来るのを見た。彼が妻を抱いた時、このアッシャーの館には妖しい火が諸所から起つた。友人は二人を連れて火の中をこの館から逃れる。時に落雷、アッシャーの館の崩壊、後には燐光飛び交ふ沼地の夜、そのしじまと不気味と神秘と。(中央映画社輸入)——と報じています。

封切当時の批評の一例として、内田岐三雄氏はキネマ旬報第三二六号(一九二九年四月一日号)に一文を載せ——

作者ジャン・エプスタン自ら銘打つてこの「アッシャー家の末裔」は、ミリュウの映画であらうといふ。

こと、これは、鋭い、とぎすまされた、不純を遠く去つて高鳴りする、感の世界である。(中略)

さて「アッシャー家の末裔」に於て我々の感得する所のものは、その神秘と耽美とのまざり合ふ妖しき光り、響き、雰囲気、結晶である。このボオの物語はいや、ボオの諸作の融合は、エプスタンの異常な感覚によつて、時に素晴らしきリズムによつて、視覚化された。それは在来の、しきたりとせられてゐる映画常識を以てしては律し得ないものを奏でる。総ては視覚化される。文学的表現によるボオの神秘と耽美とは、ここに於ては全く映画表現によつて置きかへられる。しかもそのもたらす妖しき雰囲気は、これはまたなんといふ組立ての良き。時として我々を打つて、虜とする演出とモンタージュとの調期的な成功。これは未だ我々には知られなかつた異常な力を持つてゐる映画である。が、遺憾は、エプスタンが、唯、その詩情の燃えさかる儘に、映画のストーリーを、視覚的ストーリーを、その興奮の中に打ち砕いたにある。そして、世紀末的な美しさに満ちてゐる事である。が、とまれ新しい仏蘭西映画の前衛的なものとして、その異常な、嘗てない鋭い感覚によつて奏でられたものとして、斯道に志す人々の一見にも、二見にも価する映画である事を私はここに断言する。——

と評しています。

更に海外の批評の一例として、キネマ旬報第三二〇号(一九二九年二月一日号)所載の樋谷茂一郎氏の在パリ通信中に、フランス映画界の批評家アンドレ・ラング氏の評として——

「アッシャー家の末裔」は最高級のフィルムであらう。それは浩然たる老箇の芸術品である。聰明に均衡を得た堅実な技巧で以て、巧妙に構成せられた——靈感へ奉仕のみを事とせる——シネマの詩である。私は、シネマを侮蔑する知識階級の人々へ、彼等の偏見を投げ棄てて、このフィルムを是非見る事を切望する。勿論私だとして、ポオドレルやマラルメの詩が有つメロデーなどに到底触れ得ない従来の、あの稀薄なイマジエの戯れを、肯定する事は不可能であつた、さうして殆んど凡てのシネマストが今度のエプスタンの製作の如き企図を試みたと保らず、彼等はいつも拙悪な高慢な、もののみを示した。

然し「アッシャー家の末裔」は、それ等と同一では

ない——それは此のフィルムが、フランスに於いて生誕した事を想像し能はぬ程——簡潔と均整を有つた作品なのである——」(レザンナル誌より)

と激賞します。

(引用文すべて仮名づかい原文のまゝ)

### ジャン・エプスタンの末裔

(この文及び年表については、キネマ旬報誌の好意により、岡田真吉氏の文から、一部引用したものです。)

フランスのシネアストとして、クレエルと共に私の最も畏敬するジャン・エプスタンが去る四月二日、巴里の自宅で死去した。享年五七才、晩年甚だふるわず、まだ老衰する年でもないのに突然死を伝えられ、感慨無量である。

エプスタンは一八九七年三月、ポーランドに生れたが、生粋のフランス人で、はじめ詩人として立ち、文筆活動をつづけていた。映画界に入つたのは、二二年ジャン・ブノア・レヴィと協力してつづられた伝記映画「バストゥル」を監督したときにはじまる。

「アッシャー家の末裔」はおそらく、彼の無声映画中最高の傑作と言つてよく、高速度撮影、ソフトフォーカスなどの映画技術を巧みに使つて、原作者アラン・ボオの幽玄な世界を実に見事に視覚化し得ていた。その新鮮な映画感覚はこの劇映画をアヴァン・ガルド映画の一つとせしめてゐるくらいである。彼の所謂フォトジェニイ理論がここに完全に具現された。フランスの無声映画史上、不朽の作品の一つで、この映画一本で、私はエプスタンのシネアストとしての才能を高く買うものである。

監督としての仕事の他に、映画理論の祖述者としてのエプスタンの業績がある。或いはこの方面の仕事の方がより重大視すべき位かも知れない。彼の映画理論の中心は所謂フォトジェニイ説である。ルイ・デリエツクの創造したフォトジェニイという言葉に「映画の再造によりその心的価値を増大する色々な事物、生物、人間のあらゆる姿の持つてゐる一つの能力」という定義を与えて、はじめてその内容を説明したのは彼である。このフォトジェニイ説は、無声映画の理論として発表されたものだが、トオキイ以後も、フランス

映画の性格を説明する有力な因子の一つであり、殊に戦後輩出したフレッソン、クレマン、クウルゾオなどの新人たちも大きな関心を払つてゐるらしい。

### ジャン・エプスタンの監督作品

(括弧内製作年代)

- 「バストゥル」(一九二二)
- 「赤い宿屋」(一九二二)
- 「まごころ」(一九二三)
- 「美しいニヴェルネイズ号」(一九二三)
- 「不実な山」(一九二四)
- 「蒙古の獅子」(一九二五)
- 「貼札」(一九二五)
- 「二重の愛」(一九二六)
- 「ロバエル・マケエルの昌険」(一九二六)
- 「エトナ山上映画を想う」(一九二六)
- 「モオブラア」(一九二七)
- 「G.X.II」(一九二七)
- 「アッシャー家の末裔」(一九二八)
- 「三面鏡」(一九二八)
- 「彼の頭」(一九二九)
- 「地の果て」(一九二九)
- 「モオル・ヴラン」(一九三〇)
- 「装える夜」(一九三三)
- 「リバンの女城主」(一九三四)
- 「海の黄金」(一九三四)
- 「アルモオルの歌」(一九三五)
- 「浮浪人の心」(一九三六)
- 「世の果ての女」(一九三八)
- 「機械の知性」(一九四六)
- 「タンバステール」(一九四六)
- 「悪魔のシネマ」(一九四七)
- 「海の火」(一九四七)

「アッシャー家の末裔」は、七月中毎週水曜日(一、八、一五、二二、二九日)に一回上映します。